

震災で見た風景はまるで戦争だった

2011年3月11日、東日本大震災による津波の威力は海辺の町の景色を一瞬にして変えた。まるで戦争の爆撃によって壊された建物のよう。残されたがれきの山、インフラの不通、失われた命について住民はどれだけ心を苦しめたのだろう。いま起きているウクライナでの戦争をテレビやインターネットの情報から見ていると、それは自然災害によってもたらされたものではなく、人の判断でもたらされたものである。この状態がいつまで続くのだろうという不安に対し、唯一、望むことは「平和」だろう。



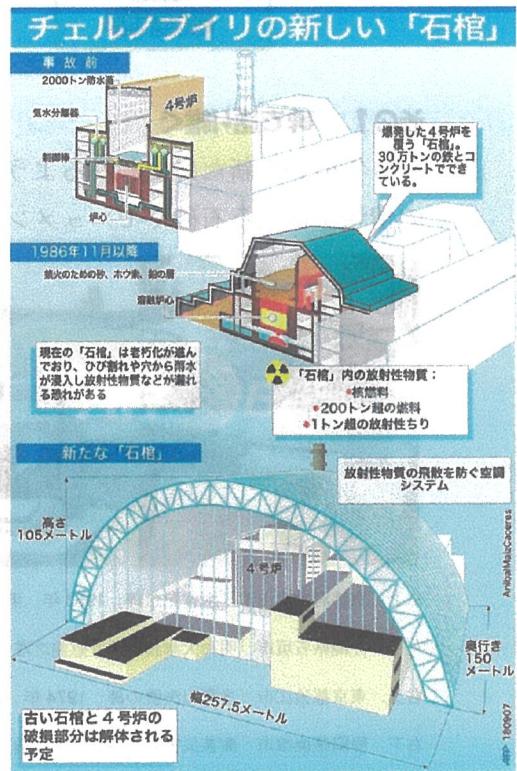
(左) 津波の後に
残されたがれき



(右) ウクライナでの
空爆後のアパート

日本とウクライナには「原子力発電所事故」という経験で重なる。福島第一原子力発電所事故（2011年）は、国内で起きたことから除染作業や計画的な廃炉に向けてニュースになることが多い。しかし、旧ソビエト連邦時代のウクライナではチェルノブイリ原子力発電所事故（1986年）が世界的な騒動となった。現在の首都キエフとチェルノブイリの距離は130km。京都市から名古屋市ほどの近さがある。ベラルーシ国境から進行したロシア国防軍は、開戦すぐにこの原子力発電所周辺を占領した。またウクライナ南部のザポリージャ原子力発電所では敷地内で戦闘による火災がおき IAEA（国際原子力機関）による警告があった。放射能漏れの報告はなかったが、再び大地に人が住めなくなる危険が今も続いている。

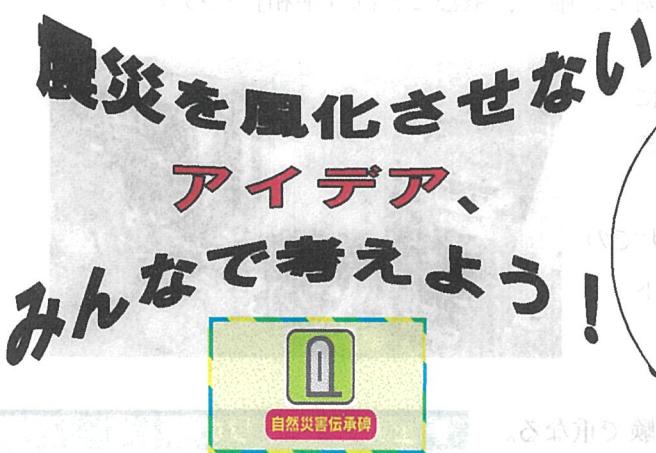
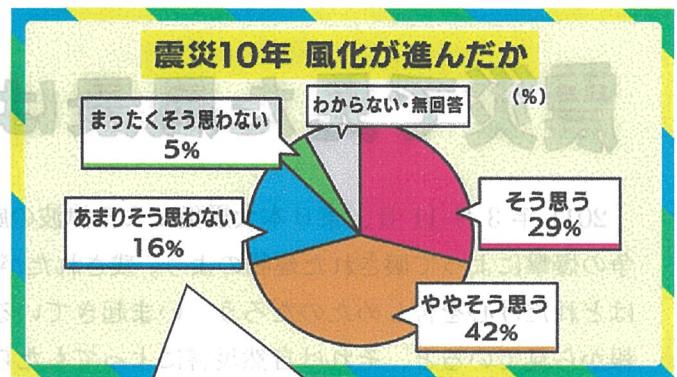
ある貿易関係者のTwitterコメントが印象的だった。「震災後福島産の食品を禁輸するしないで国外がめっちゃ揉めてた時、ウクライナのひとがうちにはチェルノブイリがあるから分かるが福島の食品は安全だ、大丈夫だから落ち着けって庇ってくれたんだよな...」遠い国でおきたことに気持ちを寄せる大切さに、そして「平和」のために、私たちができることは何か、震災11年目の日に思い起こしてほしい。↑AFP NEWSより(2007年)



災害の記憶を伝える

*東日本大震災から11年目を迎える今年から、政府主催の追悼式は開かれない。東京電力福島第一原発の廃炉をはじめ被災地の課題はなお山積みしているが、全国に拡大した新型コロナウイルス感染への対応などが国政の中心課題となり、国会での議論も活発とは言えないのが実情。政府の姿勢に変化の兆しもあり、風化を懸念する声が漏れている。

*昨年のNHK世論調査（1237人回答）によると、東日本大震災の風化が進んでいると思うかたずねたところ、「そう思う」が29%、「ややそう思う」が42%。合わせると約7割になった。



「被災地と遠く離れて暮らしている人にとって、災害はどんどん遠のいてしまう。そういう人に災の記憶を伝えるのは非常に難しい。また、伝える大切さもありますが、一方で被災した方の中には、とてもつらいことを思い出したくないという方々もいらっしゃいます。しかし、災害の経験と教訓をつないでいくことは、次の被害を防ぐためにとても大事なことです。」

（京都大学防災研究所 教授 矢守克也さん）

その1 碑で語り継ぐ

3年前から新たに使われるようになった地図記号に「自然災害伝承碑」がある。過去に起きた自然災害の情報を伝える石碑やモニュメントの場所を示している。



左上／京都府木津川市「水害記念碑」1953年 洪水

左下／沖縄県石垣市「明和大津波遭難者慰靈之塔」1771年 津波

右上／東京都狛江市「多摩川決壊の碑」1974年 洪水

右下／静岡県焼津市「激甚災害対策特別緊急事業完成記念碑」1982年

洪水【国土地理院】

その2 物語で語り継ぐ

その3 模型や映像で「記憶」を伝える



災害の記憶を伝える取り組みとして、「失われた街」模型復元プロジェクトという活動がある。東日本大震災で失われた街を模型で復元しようという取り組み。津波によって破壊された町並みを1/500の模型で復元し、そこで営まれていた人々の暮らしの記憶を保存、継承している。